

ソ連軍対戦とシベリア抑留

鳥取県 清水 要 範

ソ連軍進攻と対戦

ブルブルプス、ヒューン、機銃の弾が頭上を、そして足元に、さながら雨か霰のように。

私の所属する独立連射砲第三十一大隊二中隊は歩兵大隊に配属になり、東満国境付近で陣地を構えソ軍の進攻を阻止するため待機した。昭和二十(一九四五)年八月十二日の朝、敵戦車の到来で発射した連射砲は一発、二発命中して白煙が上る。

「擱座したぞ」喜んだのも束の間、やがて戦車から討ってきた砲弾の破片でS一等兵が負傷した。それを機に後退を余儀なくされた。なだらかな斜面は身を隠す何もない。さすが古年兵は動作が早く、辺りに人影は見当らない、と眼前に、転んでは起きしている先程負傷した戦友の姿が、見捨てるわけにはいかない。肩に担ぐように最早姿勢を

た砲の回収に、私は古年兵二人と共に麓に残した戦友を探しに山を下る。山下はソ連兵が野営、すぐ側には歩哨が照明をつけてあちこちに、気付かれたら万事終りである。はいながら手探りで、ようやく穴が見つかった。意識もあるようだ。交替で背負い二人は後押しをしながら裏山へ。洞窟の中で軍医の手当てで背中の砲弾の破片を摘出、命に別状はないらしい。

逃避行

絶え間なく撃ち込まれる銃砲弾に、運悪く流れ弾で負傷する者が出る。山の下から時折ソ連兵が大声をあげ登ろうとするのを撃退しながら時を過ぎ。未明、稜線に出た中隊長は狙撃に遭い戦死。

八月十五日、月の冴えた朝だった。山は完全に敵軍に包囲されているらしい。私共は歩兵大隊に配属されてその指揮下、夜に入り大隊命令で既に交信の絶えた主力の後を追いつ南下することになった。四百余人の兵員は二百五十人くらい。

我が中隊は三十人ばかり、食糧や武器は持てる

低くすることもできない。弾丸が当たたらぬのが不思議なくらい、ようやく山の麓の木の陰に、百メートルばかりの距離が何キロメートルにも感じられた。そこからは急斜面、背負って登ることは無理だ。意識もほとんどないようだ。幸いあちこちに蛸ツボがありその一つに体を押し込んだ。

山の中腹には深さ一メートルぐらいの塹壕が掘り巡らされている。先に登った人影もちらほら、気持が少しは落着いた。木の間から見える山の下は道の道は敵の戦車や自動車が進んでくる。時折り道端の蛸ツボから肉攻班が戦車の前へ、そして轟音と共に黒煙が三十メートルぐらい上る。止まった戦車はしばらくして動き出す。あとには人影も何もない。捨て身の攻撃も効果はないようだ。

山の裏側には既に登った連中が集結していた。その数は三分の一ぐらいで、残りの消息は分らない。山を囲む道路から絶えず砲弾、機銃弾が撃ち込まれる。軽快な音は自動小銃だという。蛸ツボに身を置きながら時を待つ。夕暮れになり放置し

だけ持ち、負傷兵は洞窟に残したままの出発である。日中は山中を草の踏み倒された方向をあてに進む。持った食糧には限りがある。食物を探して畑に出ると飛行機からの機銃掃射に遭う。私達は連射砲二門を持ち、馬を連れているので最後尾で、畑も荒らされた跡ではろくな物はないが、トウモロコシや西瓜、南瓜などの取り残しをあさりながらの逃避である。

一週間ばかり歩いて日本軍の建てたと思われる山小屋にたどり着く。ここで二、三日滞在することになり、探してきた牛の肉などで栄養補給もできた。そこへ、残してきた負傷兵が数人、瘦せて眼ばかり光らせながら追いついてきた。亡霊とまがう姿に皆驚き、命令とはいえ放置した非情さを悔い言葉もなく迎えた。

牡丹江を目指しての南下に鉄道横断が必要という。既にソ連兵が所要所で警戒に当たっている。

小銃部隊は身軽に次々に渡って行くが、馬を連れ砲を曳いた我々は簡単にいかない。その特列車が

通過、その音の消えぬうちに一斉に横断したが生きた心地なし。後は急峻な山道を登らねばならぬ。腰を降るせば直ぐに睡魔が襲う。疲労は極限に達し馬の尾に掴まり、歩きながら夢を見る始末であった。

野宿ばかりでは堪えられず満人部落で野営を試みる。日の丸の旗が立ててあるが人影はない。民家の糧秣や鶏などを失敬して眠りにつく。やがて夜の明けきらぬ頃銃声に目を覚ます。満人の襲撃に相手をしておれば必ずソ連軍が戦車と共に現われる。急いで退散するしかない。その度ごとに流れ弾で人や馬が倒れる。それを放置して逃げるのは堪えられない。

行く先々で戦死者の屍が、日本兵はうつぶせ、ソ連兵は仰向けに倒れたのが印象的である。手を合わせて見過ごすだけである。

武装解除

一カ月近く経ったであろう。ソ連機から戦は終わったので降伏するようにビラが落とされたり、人

屈辱の虜囚

パラパラと大粒の雨音に慌てて目覚めた。一カ月近くの野宿で神経過敏になっている。そこは屋根の下だと気付き再び深い眠りについた。武装解除後は朝鮮人部落に分宿し、心づくしの夕食を頂いた夜半のことである。

翌朝集合の指示で宿泊した札にと余分な毛布などを宿に残して朝鮮人に見送られながら出発し、ソ連兵の看視の中行軍が始まった。看視兵の大部分はまだ十五、六歳くらい、隊伍から遅れると「ベストラ、ベストラ」と急かされる。小休止で水くみや用便などで隊伍を離れると銃を突きつけてソ連兵がやってくる。「トケイないか、万年筆ないか」身体検査をして貴重品と思われる物は奪ってゆく。口惜しさに言葉もなく黙々と歩くばかり。夜を徹して歩き着いた所は蘭崗飛行場であった。ここでまた一人あて入念な検査が始まる。

それまで隠し持った時計、いつまでも持ち堪えることは難しいと迷った挙句、奪われるのも癪で

ずてに終戦の情報が度々入る。一方降伏して出た日本軍が山合いから銃撃されて全員死亡したなどの噂も入る。とある朝鮮人部落の近くの山に到着、この部落で野営を試み斥候兵が出された。やがて白旗を立てたソ連のジープが斥候兵を乗せてきた。その終戦の報告を受け大隊副官が自ら真偽を確かめる決断をされた。「明朝十時までに帰らぬ時はデマだと思いその後の行動をとるように」と言い残してその車に伴われて出発された。その夜は山で野宿し報せを待った。その夜何人か姿を消した。

翌朝ジープと共に大隊副官の姿があり、初めて終戦が確認できた。山に連射砲は放置、馬も放した。一同敗戦の悔しさに男泣きした。

一方「これで戦争は終わった」との安堵で複雑な気持である。その日にソ連兵に伴われて朝鮮人小学校の校庭で武装解除を順番を待ちながら受けることになる。万年筆や時計なども見付かれば取り上げられる。その時は時計は免れたがソ連兵の突きつける銃口に敗戦の屈辱を思い知った。

順番待つ間土中に埋めた。それは入学の時父親が買ってくれたスイス製で、五年間一度も故障のなかった代物だった。

既に収容された日本軍が格納庫などの土間に満ちていた。

ここでは時々玄米や高粱などが支給されて煮炊きは自分でするため水くみや薪取りが日課である。私は戦闘で持ち物一切捨てたので缶を拾い飯盒の代りにした。毎日千人ぐらいの大隊が編成され日本に帰還といつては出発していた。その都度順番がくるのを心待ちにした。

牡丹江収容所

一週間余りで私達もここを出発した。日に夜を継いで何日か歩かされた。隙があればソ連兵の身体検査、そして銃口を向けて急かされながら到着したのは牡丹江から少し山に入った満軍の兵舎だった。既に二万人ぐらい収容されているという。

九月も下旬で朝夕はめつきり冷え込む季節になっていた。穀類はわずかでも支給されて薪集めや野

菜とりが仕事である。

警戒兵に連れられて付近の畑で大根や白菜などの調達、薪は街に出て日本人の社宅などを壊して持ち帰るのである。或る時は防空壕の中で日本人母子の腐乱死体を目にもすることもあった。やり切れぬ思いである。

そのうち工兵隊など貨車の改造だと使役に駆り出され、汽笛も頻繁に聞こえるようになった。鉄道が復旧すれば日本への帰還を疑わず、時には演芸会なども開かれてお互い励ましあった。

十月も半ば頃千人ぐらいの大隊が編成され収容所を出発してゆく。年内には日本へ帰れる。

弾んだ気持の順番待ちに寒さも食糧不足も我慢ができる。既に十八大隊が出て行き、残りは六百人ばかりになった。

最後の大隊

気がつけば同じ部隊の者は一人もいない。がら空きの収容所は土間から床上の寝台があてがわれて指揮班要員を命ぜられたが特別の仕事はない。

しばらくして陸軍中尉の将校が二人、着の身着のまま入所してきた。その一人〇中尉の将校当番を務めることになる。この将校は特務機関員だったとの噂が流れたが本人の口からは何も聞かない。

「清水君一緒に帰ろう」この中尉殿とシベリアで二年ばかりの付き合いがあったが、その後の消息は不明。

シベリアへの旅

十一月も下旬の日、十九大隊も出発の指示が出た。私は二中隊の指揮班で引き続き〇中尉の当番として、貨車は二階造りで三十人ぐらい、真中にストーブ、その後に形ばかりの壁の便所、穀物や水は貨車ごとに支給されたが煮炊きはストーブだけ、ストーブの周りに鈴なりに下げて待つが中々煮えず、将校殿に召し上がって頂くのがやっとで、中隊長当番と私は飯盒の蓋で小豆を炒ってかじりながらの我慢。今少しで故郷の土が踏める。みんな嬉々として話が弾む。貨車の大戸は外から施錠され二階の小窓からわずかに外が見える。南下す

るはずの汽車がやがてハルピン駅に到着、鉄道の都合でここから南へ、などと考えていたが、夜間にチチハル到着、大方鉄道の復旧が遅れてシベリア鉄道でウラジオストク経由かもなど、一縷の望みと或いはシベリアへの不安を抱きながら。

その夜間、隣の貨車から五人の逃亡兵が出たらしい。以後警戒が厳しく外への出入りは禁じられた。夜明け、小窓からのぞけば列車はハイラル、満州里を通過してゆく。焼け焦げた戦車や装甲自動車も放置され、ここでの戦争の烈しさを物語っている。

夕方到着した所はチタ駅。ここで食糧の支給があったが、もう諦めるしかない。列車は一路西進しバイカル湖畔を過ぎ、イルクーツクを経て雪原に停車した。牡丹江出発から二十数日経ったと思われる。

将校当番

雪が三十センチぐらい積った中をようやく歩く収容所の入口に到着、営門で入念な所持品検査を

受けた。もう何も取られる物はない。既に四百人ぐらいの先遣隊が作業に従事していた。私達二中隊にはログハウスの建物が割り当てられて、隅に将校室、ここが中隊長と〇中尉の居室、その入口に将校当番の寝台が指定された。

夜半体を揺すられて目覚めると軍曹や伍長殿の飯盒を提げた姿。「おい、飯をくれんか」指揮班は八人、他は三十人ぐらいの単位で食缶（一斗樽）一本の飯があてがわれる。当然私達は食べきれず半分以上残る。二等兵に下士官の懇願が毎夜続いた。

〇中尉が伐採組の小隊長、中隊長当番と私は伐採現場で将校の弁当を温め、湯を沸かすぐらいで直接の仕事はない。暇をみて伐採班の枝焼きの手伝いをする程度で至極恵まれていた。

上官に意見

このまま黙ってれば当分の間は平穏だっただろう。日ごとに強められる労働、次第に劣悪になる食糧、恵まれた私の立場が皆に済まない気持ち

を起こさせた。一カ月ぐらい経った頃中尉殿に「私を作業班に出して下さい」、この願いは許されて伐採作業につく事になった。Y軍曹を筆頭に四人一組、ところがこの軍曹少しも仕事をしない。次第に上るノルマを達成するのは容易ではない。たまりかねて「軍曹殿も少しは手伝って下さい」と催促、これがO中尉に告げ口されたらしい。その夜将校室に呼ばれた。「貴様上官に盾突く気か」言いざま往復ビンタを頂戴した。当番を断った腹いせもあつたであろう。その後も事あるごとにO中尉にしごかれることになる。しかし軍曹は洪々であるが、その後仕事をしだしたのは収穫だつた。

ノルマ

目の届かぬ広い樹林、赤松が主で落葉松や白樺など混在している。伐採は四人一組で一本の木を倒し枝葉を焼却、所定の長さに丸太を切る。当初悠長だつた仕事も次第にノルマが上げられてゆく。そして二人一組に改められた。山は区画され「この区画が済めば東京ダモイ」ロシア人の監督が言

う。ノルマを達成すれば握り飯の増配や煙草の支給がある。帰国させるとの甘言と増配に吊られて精を出すより更にノルマが上げられる。イタチごっこである。ひたすら日本への帰還を信じ、酷い寒さ、劣悪な食糧、歯を食いしばって重労働に堪えるしかない。その区画が終れば次へと移ってゆく。

軍人勅諭

下級兵はいつまでも下級兵、私は初年兵の二等兵である。朝六時起床、コップ一杯の水で口を漱ぎ洗顔する。そして寝台に正座点呼の後O中尉の音頭で軍人勅諭の斉唱である。初めは仕方なしやっていたが、次第にバカらしくなる。「捕虜に階級も軍隊もあるものか」或る朝あぐらのまま知らぬ顔をしていた。直ちに中尉殿に胸ぐらをつかまれ引きずり下ろされた。「貴様!!」ビンタの嵐である。何日か続いたが、そのうち諦めたのか何も言わなくなつた。いつ頃か斉唱も取り止めになつた。

飢餓地獄

初めは玄米が高梁や粟に代り、それも皮の付い

た原穀のまま、そして脱脂大豆の粉、おじやからお粥、そして申し訳だけ野菜や魚などの入つたスープ状と劣悪な食糧、それも飯盒の蓋一杯あてが二食分、黒パン三百グラムが一食分は、酷寒の中の重労働に堪えられるはずがない。誰となく松の皮（荒皮を除いた白い部分）を煮て食べることが始まつた。渋みがあり、かんびように似た感じである。食い過ぎて消化不良や腸捻転で医務室が繁盛した。朝夕、寝台の上から手に手に松火を掲げながら、煤で汚れた顔で食事当番の動作を一斉に見守るさまは、さながら地獄絵図のようである。

遅いシベリアの春も、五月の終りは凍つた大地も弛み、やがて一斉に木の芽、草の芽が伸びる。アカザやタンポポ、蓬は言うに及ばず山にら、山うどなどと名前をつけては手当たり次第腹の足し。森林は湿地帯が多く、八、九月頃は多様な茸が発生する。毒草や毒茸で中毒を起こす者、夢中で山を歩き迷つてしまい大騒ぎになることも度々あつた。

身体検査

真裸にされソ連の女軍医が尻の肉をつまんて等級をつける。軍医は看護婦程度の知識らしい。医学の遅れたここでは日本の軍医や衛生兵は重宝がられた。民間の診療にも当っていた。毎月一回の検査で一〜三級とオーカに分けられ、作業も重労働から軽労働、オーカは営内の清掃などに振り分けられる。そして病人などは帰還の名目で収容所を出る。羨ましく見送つたが、しばらくたつと回復して戻って来る者もあつた。本当に故国の土が踏めるだろうか。

栄養失調

入ソして二回目の冬に入る。劣悪な少量の食糧と酷寒の中での重労働に次第に体力は消耗してゆく。立つて後を向けば尻の穴が見えるといつても過言ではない。皮膚は弾力はなく鶏の毛をむしつたようになる。三十七、八歳からの召集兵や初年兵などに衰弱が多い。意識が薄らぎ意味不明のこゝとを口走る。知らぬ間に枯木が朽ちるように息を

引き取ってゆく。葬るための特別の時間はない。席の隣などの親しい者が夜間に始末することになる。凍てついた土を焚火で溶かしながらの穴掘りは三十センチも掘れば朝になる。形ばかり土をかけて番号の書かれた杭を立てる。次第に杭が増えてゆく。明日は我が身だろうか。ソ連抑留者は六十万人以上という。彼の地で無念の死を遂げた者も一割以上。

夜間作業

シベリアの冬は三寒四温がはっきり現れる。

夕方から風がないのに煙突の煙が横に広がる。そして次第に気温が下る。氷点下三五度以下になれば作業は休みとなる。朝は気温が下り喜んでいると昼前から上ってくる。やがて作業に駆り出されることになる。汽車の積み込み作業は気温にかかわらず行われる。氷点下三五度以下の場合特別に体力のある者が指名される。夜間など照明と暖をとるため焚火が許される。天を焦がすような焚火も冷えきった風で熱さを感じない。気のつか

ぬまま衣服が焦げてぼろぼろになったりする。薪の積み込みは屋根付きの貨車、中を井桁に積んで空間をあげごまかしがきくが丸太積みはそうはいかない。防寒外套に手袋をしたかじかんだ体は機敏な動作はできかねる。一人でも力を抜けば事故故につながる。監督に急かされながら歯を食いしばってやるしかない。貨車にかけた輪木や足場板が外れぬように細心の注意に、終ればへとへとになる。

入浴と虱退治

一カ月に一回ぐらい入浴がある。入浴といっても温めた部屋で手桶一杯の湯をもらい体をこする。体にたまったあかは黒いこよりとなって落ちるが完全にはきれいにならない。それでも少しはすつきりする。入浴と同時に衣服は一切滅菌室に入られて虱や卵が蒸し焼きにされる。特に冬期は虱の発生が多く衣服の縫い目に産みつけた卵は見事とさえいえる。入浴が終れば剃刀を持った理髪兵が脇毛などの毛を剃る。裸になった息子は何とも

哀れである。やがて毛が伸び始める頃はチカチカ痛がかくてやりきれない。

虱よりも南京虫は始末が悪い。寝台などの木の合わせ目に潜み、夜間寝静まった頃出てくる。首筋や手首、足首などにくいつき、噛み跡はうんだり痛んだり、たまに捕まえて潰すと異様な臭いは堪えられない。

もう一つの吸血虫は蝨である。低地はほとんど湿地帯のためか七月中頃から九月の霜の降るまで大群が発生する。普通の三倍ぐらいの大きさで、晴天でも辺りが暗くなるほどの凄さである。噛まれると顔は変形し目は腫れて見えなくなる。ひどい時は発熱する。これを防ぐため防蚊覆面を被つての作業となる。夏の直射日光は三五度にもなる。この暑い最中の覆面は何ともうつつとうしくやりきれない。

営倉入り

旧軍隊でもご存じのごとく営倉に入れられることは決して名誉なことではない。収容所にも営倉

があった。厳寒期は防寒靴（カートンキー）が支給される。羊毛のフェルトを長靴型にしたもので、足にぼろ布を巻き、これを履くと、結構寒さに堪えられる。気温の低い湿気の少ない雪はパラパラしてべとつかない。

ところが雪解け時期には水気を吸い取り、中まで沁み込み、放置すればカチカチに凍る。夜は乾燥室に吊るして乾かすことになるが、五、六十足を入れるので場所が悪いと少しも乾かない。暖炉に直接置くのは禁じられているが、これに背いて一夜暖炉の上に置いた。気掛かりで翌朝は一早く乾燥室を開けると毛の焼ける臭い、そして煙が充満している。「しまった」もう後の祭りである。その日は代りの靴をもらって作業に出た。その夕方営門で名前を呼ばれてそのまま営倉入り。営兵控室の扉から階段を五、六段降りると三畳ぐらいの地下室がある。床はコンクリートで缶が便器の代りに一つ置いてある。三月といえども夜間は氷点下二〇度以下に下る。空腹と寒さで体が震え、

眠れるところではない。階段を上り戸の隙間からわずかに洩れる暖気に体を押しつけて過した一夜の長いこと。朝解放されて幕舎で友人のくんでくれた熱いお茶でようやく人心地がついた。

次は翌年の三月頃、その日は糧秣庫の不寝番を命じられた。営門を出ていつも作業で通る反対側の柵の外の倉庫に穀物は施錠された中にあるらしい。月の明るい底冷えのする夜だった。倉庫の前には凍った蕪が野積みにされている。柵は十メートルぐらゐの間隔で二重に張り巡らされている。蕪を投げればこの柵を越えて収容所の庭に届く。退屈のぎも手伝い三、四十個投げ込んだ。勤めがすめばゆつくり拾うつもりである。長い夜も勤めを解かれ、投げ込んだ所を探したが一つもない。その日は休み、いつ沙汰があるかと不安な気持ちでいると夕方呼び出しがあつた。二度目の営倉入りは、一度経験しているので、初めの時ほど苦痛は感じなかつた。柵の四隅の望楼には歩哨が四六時中監視していることに気付いたのはしばらくして

からだった。貧すれば鈍するとはこのことだろう。

青年行動隊

昭和二十三年の春、鉄道敷設の路盤の突貫工事が始められた。この仕事のため青年行動隊が組織され、私も指名された。まだ土は凍てついている。焚火で溶かしながらの土掘りは遅々として進まない。鶴嘴も一時間も使えば丸くなる。まして今まで伐採などが主な仕事で土工は初めてだし、衰えた体力で一日中鶴嘴を振るのは重労働である。ある日スコップで土を投げた途端背中に激痛が走った。体が痛くて曲げることもできない。診療所の診断では相手にしてもらえない。徴候の現われない肉離れや神経痛などは認めてくれない。反面皮膚病や発熱などは軽くてもすぐ休養が許される。痛みがとれる十日間ぐらゐは苦痛に泣いた。思えば四年間病氣や怪我で一度も休んだことはなかつた。

便所の掘り取り

収容所の便所は素掘りした穴に踏み板が掛けて

ある。普通便所はくみ取るものだが冬期の便所は千人の糞尿が凍って盛り上がってくる。

これを鶴嘴で砕き馬車で捨てるのである。一度この仕事を命ぜられた。夕方帰り暖炉の側へ、やがて「おい、くさいぞ」掘り取り中飛び散った粉が衣服に付着し溶けるに従って臭いを放つ、慌ててその場から逃げねばならない。

これは入ソして間もない頃、伐採作業で道具を受取っている時、一人が何気なく鋸を舐めたらしい。凍った鋸に舌が付着して大騒動になった。「おい、小便だ」誰かの機転で大げがにならずにすんだ。いずれも酷寒のシベリアならではの笑えない喜劇である。

在満ざらい

身体検査の結果三級になった時のこと、軽労働で伐採した跡の枝葉などを焼却掃除する作業、仕事は楽だが困ったことがある。この指揮は四中隊長の老中尉がとっていた。なぜかこの中尉が在満ざらいらしい。在満は満州に職を持ち召集や現役

で入隊した者である。「貴様が満だそうだな」棒で殴る仕事を。別に仕事を怠けているわけではないのに姿を見ればこの始末、これには閉口した。まさか大尉殿に抵抗することもできず、その場から逃げるしかない。シベリアに送られる際、国境付近で脱走したのはほとんど在満組だったらしく、この時の隊長として苦い体験でもしたのでろうか。幸いこの仕事は二十日ばかりで代ることができた。

保養

共産主義では自由競争による発展はない。自発的に極度の能率を上げること「スターハーフ運動」が奨励されているらしい。ノルマを大幅に超過達成した者を労働の英雄として顕彰し保養も与えられる。伐採などの重労働に明け暮れ体力も落ちた昭和二十二年の二月頃、女医の身体検査の後三週間の保養を与えられた。清潔な部屋に個別の寝台、同室者は三人で食事は炊事係が運び、食器を洗ったり身の回りを片付けるくらいで、何もしなくてよい。二月は酷寒期でこの休養は有難かつた。終

る頃は大部分体力も回復していた。

二回目は青年行動隊で突貫工事を終った八月頃、この時は十日間だった。体力の消耗具合で期間が決められるのだろうか。シベリアでも真夏の直射日光は三五度を超える。保養が終る頃は幾分涼しくなっていた。

飯上げ当番

飯上げは朝と夕方二回下級兵の仕事で、その日も作業後U伍長の引率で炊事場へ、スूप状の雑炊が八分目ぐらい入った食缶(一斗樽)を担ぐが、ポチャポチャ安定が悪い。右手で樽の縁を持ち左手で底を支えながら暗い坂道を担ぎ上げるのは疲れた体には辛い。幕舎に着き樽を降ろした途端伍長が「清水、手を出してみろ」両手を出すと右手がスूपで濡れている。「貴様、つまみ食いたな」満座の中で突然殴られた。こぼさぬように担ぐのが精一杯である。余りの理不尽に伍長の胸倉を突き飛ばし取っ組み合いになった。あとは寝台から飛び降りた何人かに袋叩きにされた。抑留の鬱憤

晴らし、初年兵が目標になっただろうか。

鉄道補修

伐採や薪割り、貨車の積み込み等が主な作業だったが、鉄道の補修作業に回されたことがある。冬季のシベリアは大地が凍り地盤が持ち上がる。春先、狂った地盤や線路を直すのである。作業班は十人ぐらい。看視兵はなしでロシア人監督の指示に従う。監督の合図で枕木をてこで持ち上げ、下に砂利を詰めたり、線路のゆがみを直したり、犬釘の補充など、付近には民家や、無人だが駅の建物など、久し振りに解放感の味わえた仕事だった。通過するのは貨物列車が二本ぐらい、たまには監督が粉煙草を恵んでくれたり、しかしこの作業は長くは続かなかった。

給料

すべて一〇〇%ノルマを達成するのは難しい。そこで考えられたのが作業班で大部分の者を八〇%ぐらいに押さえて記入、一、二人に余った分を集中して一〇〇%以上に報告する。帳簿のやり

繰りである。一〇〇%以上には超過した率で給料(報償金)が支給されるようになった。それをみんなで分ける。わずかだが自由になる金である。早速売店で紙や鉛筆、煙草など買うことができた。復員後の話では収容所によってかなりの金が支給された所もあるらしいが私どものところではほんの雀の涙ほどの額だった。

このやり繰りはソ連側も黙認していたようだ。

民主化運動

いつの頃からか将校は姿が見えなくなり、大隊長に代ってY氏が委員長の名称で点呼などで演説するようになった。或る寝静まった夜、肩を揺すられて目覚め、誘導されて別の建物に伴われた。既に六、七人集まり、首班はY委員長、他の収容所では階級がなくなり皆平等なこと、初めて日本新聞も見せられた。新聞には戦後の日本の様子は芦田内閣の昭和電工疑獄事件や天皇制の批判、資本主義の矛盾や米国追隨政策の批判などが記され、軍隊の階級が抑留でそのまま残されていることの

不合理などが論じられた。その後も夜間三回ぐらい誘われて参加したが、作業で疲れた体では続けることはできなかつた。室はソ連将校の控室らしかった。Y委員長がE少佐大隊長と代った経緯は分らない。他の情報のない時代、私達は軍国教育を受け、天皇のため命を捨てるのが当然と考えていたが、これからは共産主義思想に次第に洗脳されることになる。それでもこの収容所は旧部隊ごとまとまったの入所が多く、下士官を筆頭に階級制度が生き続けた。

転属

昭和二十三年の秋に入る頃、所持品をまとめて集まるようにと指示された。近くに貨車が停まり、六、七人がこれに乗せられた。何の説明もなく不安な気持で貨車に揺られる。四、五時間が過ぎ降ろされた所は日本人の収容所だった。

ずっと後で知ったが、初めの収容所はタイセツトからバム鉄道に入り四十六キロ地点のプロコベスク、移動したのは百九十三キロ地点らしい。五

百人余りが收容されていた。各々の班に配属された。驚いたことに階級章など見当らず、さん、君づけで呼び合っている。作業開始前の集合で分かったが、委員長が組織を統轄し啓蒙(宣伝)、文化、作業、生活など、各部長が専任でいるらしい。作業の指示は作業部長がしていた。私は二十人ぐらいの班で森林鉄道に丸太の積み込み作業が仕事。班長のH氏はみんなで選んだという。元の階級は伍長で、温厚で面倒見のよい人だった。收容所内は至る所民主化宣伝の壁新聞が張られている。ソ連兵の看視はなく監督もめったに姿を見せない。貨車が来れば自発的に仕事にかかり、合間には日本新聞の輪読や民主化についての討論などが盛んに行われ、自由に意見も述べられる。いつ故国の土を踏めるか当てはないが、前の收容所に比べて気持を楽に持つことができた。

文化祭

秋も深まった日曜日、文化祭が催された。五百人余りが重なるように一堂に集まり、文化部長の

挨拶に続き、先ず楽団によるロシア民謡や労働歌、革命歌などの演奏は玄人はだしの見事さ、ギター、バイオリンやアコーディオン、太鼓などの本物に驚いた。次の演劇は封建社会の農村の地主の息子と小作人の娘の恋物語など、どこであれだけの舞台衣装を揃え、洗練された芸を練習したのか、一同固唾を呑んで見守った。この催しに弁論大会があり、五人の一人に私も指名された。辞退したが許されず、触れれば破れるような藁半紙が一枚渡された。仕方なく前の晩徹夜で原稿を書いたが、破れてしまうので書き直すこともできない。

資本主義を非難し、共産主義を謳歌、復員すれば労働者、農民のため闘うといった筋である。五百人の前で話すなど経験はなく、順番を待つ間胃がキリキリ痛むのを覚えたが、演壇に立つと意外に落ち着いた。あとの講評では「要旨が大変よろしい」と誉められたが賞品などはなかった。

吊し上げ

年の替わった二十四年の春、作業前の集合で委

員長の言葉の後、突然T氏が壇上に上りS委員長への批判を始めた。いわゆる大衆批判である。結局温厚なS委員長は自己批判をされた。その挙げ句経過は分からないがT氏が委員長になった。その数日後伐採作業に出たS氏は伐木の下敷きになり帰らぬ人となられた。雄弁で押し強いT委員長に楯突く者は無かったが、T氏がS氏を殺したも同然と陰で囁き合った。あとでT氏も一緒にナホトカで乗船待ちしたが、今度はT氏がオルグの吊し上げに合い真っ青になって弁明していたが、同じ船に姿はなかった。

一段ベッド

年明けから移動で收容所から次々出発してゆく。次第に少なくなつた抑留者、今まで二段ベッドで薄暗い部屋も一段に改造されて窓も大きく明るくなった。次第に給食も質、量ともに良くなった。ほぼ腹を満たすまでになると現金なもので、それまで食物の話に明け暮れていたのが色気話も出始めた。囲碁や将棋の道具を作ったり、相撲や腕相

撲に興じ気持も明るくなった。日本新聞も度々配られて、総選挙で共産党議員が躍進、鳥取県からは米原昶氏の当選などが報じられ、更に五、六月から引揚げが再開されたこと、復員者が揃って共産党に入党したとか。

巨人軍の水原監督がナホトカで吊し上げられたなども掲載されていた。

ナホトカに集結

八月に入った朝の作業に出る準備中「復員させるので荷物を纏めて集まるように」指示が出た。半信半疑で持物(といっても何も無い)を集め集めた。三百人ぐらいの人員、そこで收容所長の挨拶が「四年間の労働に対する労りと、帰還したら日本の共産主義の実現に努力するように」と通訳を通じてあった。ほどなく到着した貨車に割当てに従って乗車した。

本当に今度こそは帰れる確信の喜びと、わずかながら四年間住んだシベリアに惜別の思いが交錯し複雑な気持だった。入ソの時は雪の中、窓や扉が

閉ざされ、警戒兵に威されながらどこへ拉致されるのか不安の中の輸送と違い、窓は全開、停車すればどこでも降りられた。時には川で水浴して汗を流しながら、復員後の話が弾んだことはもちろんである。十日ぐらいの旅でナホトカに到着した。

乗船待ち

ナホトカは小さな漁港だったという。引揚げのためバラックが建ち並び既に多くの人が入所していた。一万人以上が待機しているとのこと。至る所に壁新聞やアジビラが貼られている。小高い丘にある日本人墓地の清掃などで特別な仕事はないが、労働歌や革命歌などや踊りの指導など絶え間なく行われる。そしてアジ演説が始まる。オルグが「君達を筋金入りにして敵前上陸させる」などと叫ぶ。素直に合点したふりをせねばならない。資本主義、軍国主義者は復員させないという。

遠州丸から望む日本

何日か待った時、ついに乗船名簿に私の名前が載った。みんなばらばらで知人は見当らない。

引揚船は「遠州丸」。船中では絶えず革命歌やアジ演説で騒然としている。波が静かだったためか不思議に船酔いはない。日中は甲板に自由に出入れたので太陽を浴びながら海を眺めていた。呆然と海を見ていると「日本が見えるぞ」その声に一斉に前方を見る。はるかかなたの水平線に雲か霞か判別できない影が浮かんだ。その影が次第に濃く青く、そして緑色に。夢にまで見た、半ば諦めた故国日本。体が喜びでふるえ、胸にグツと熱いものがこみ上げてきた。

復員局

緑の山に囲まれた舞鶴港、船は静かに湾を進み東舞鶴港へ泊まった。板の棧橋は海に長く突き出していた。この棧橋には出迎えの婦人会の方々、幟を立てて帰りを待つ家族らしい姿。

名前を言って安否を尋ねる人。この中に「岸壁の母」のモデルになった端野さんもおられたのだろうか。復員局は木造の大きな建物で海軍工廠のもと宿舎とか。その講堂らしい建物に案内された。

ほどなく入浴の指示、広々とした浴槽、たつぷりの湯に四年ぶりのあかをゆつくり流した。感傷にひたったのも束の間、風呂から上って驚いた。荷物が荒らされ記録した紙がない。わずかな金をはたいて買った紙がすべて没収されていた。支給された衣服に着替えて順番に二階の部屋へ。警察官と思われる人が三人、シベリアでの状況を詳しく聞かれた。復員後のことも聞かれたが、記録した物を返せ、返せぬの押し問答で反発の気持もあり共産党に入党すると答えた。

引揚証明書と共に支給品が配られた。陸軍の夏服上下は中古、下着上下、靴、飯盒、水筒に布製の背囊などで一坪ほどの携帯天幕もあった。引揚手当として千円支給されたが、靴下やタオルなどわずかな買物でなくなり、物価の高いのに驚いた。

村をあげての歓迎

復員者は県ごとに集められた。県の世話課から初老の係員が見えられた。「清水さん、家族の方が待つておられるから真つ直ぐ帰りましょうぜ」優

しい口調で諭された。復員局出発の朝、別室に呼ばれた。そこには思いもかけず父親と叔父の姿があった。乗車券は既に父親が受け取っていた。舞鶴駅に伴われた鳥取県の引揚者は七人ぐらい、その名前や住所などどうしても思い出せない。駅頭や途中の乗換駅などでは必ず婦人会の湯茶の接待を頂いた。

鳥取駅では県知事の出迎えを受け慰労の言葉を頂き、私が代表で帰国の挨拶をした。この知事が民選第一号の開拓課長から当選された西尾愛治知事と知ったのは後のことである。

途中それぞれの駅で皆と別れ江尾駅に降りたのは夏の日も傾きかけた頃だった。駅頭には村長を始め、小、中学校の先生や有志の面々、青年団など、トラックを仕立てて大挙の出迎えに驚いた。更に集落の入口では集落中の人々、こっそり一人帰宅する考えでいた私は戸惑いと共に感激した。その夜は拙宅と公会堂で徹夜で歓迎の宴が続いた。

就農を決心

数日後、根雨の職業安定所に出頭、復員手続きと共に就職希望があればと求職先を紹介された。長い間故郷や家族に心配をかけた身、迷うことなく百姓をすることに決めた。その時千円の支給があったがカッターシャツ一枚買って終わった。二十五年春、周囲から急かれて結婚、子供は他の職につき家を出た。あれから六十年近く米を作り牛を飼いながらまだ現役（跡継ぎがないので）で百姓を続けている。あたり青春を棒に振った口惜しさも次第に薄れ、シベリア旅行ができたと懐かしくさえ思うこの頃である。

なお、帰って知った二つ違いの弟の戦死、志願させねば死ぬことはなかった。海軍航空隊に入隊し、大竹海兵団、神奈川県相模野航空隊までは文通があった。その後の消息は絶えていたが、昭和二十年四月ビルマ沖で戦死したという。十七歳の死は痛恨の極みである。

終りに

敗戦から六十年、あの悪夢のような時代を知つ

た世代がだんだん少なくなってきました。戦争がいかに愚かで悲惨なことか。今なお世界各地で発生している紛争やテロ行為などが止み、一日も早い真の平和が到来することを願って止みません。

【執筆者の紹介】

大正十四年六月二十四日 鳥取県日野郡江府町生

昭和十七年十二月 鳥取県立日野農林学校

卒業（戦中繰上卒業）

昭和十八年一月 満州拓植公社入社 北

安地方事務所勤務

昭和二十年五月 満州国平陽鎮独立速射

砲第三十一大隊二中隊

入隊

昭和二十年九月 武装解除 以後シベリ

ア抑留

昭和二十四年九月 復員 以後農業に従事

公職団体役職（就任順）

江府町農業委員

鳥取県指導農業者

江府町議会議員

江府町文化財保護審議委員

鳥取県日野地方農業共済組合代表監事

江府町選挙管理委員

全抑協鳥取県連合会江府町支部所属

（鳥取県 原中 宣夫）

抑留体験とその前後

愛媛県 梅崎 文夫

一、出生より兵役に、そしてシベリア抑留、ナホトカまでの日々

その一 生年月日と出生地そして現住所
大正十二（一九二三）年九月五日、愛媛県北宇和郡好藤村内深田（現在の鬼北町）において私はこの世に生を受けた。幼少時代をこの地で過ごした私は、小学校三年生を修了した年の三月の終わりに両親の郷里である宇和島市大浦（出生地より約四キロほど離れている）に移り現在に至っている（海岸部）。

その二 学校卒業より兵役につくまで

昭和十六（一九四一）年の三月、私は県立北宇和農業学校を卒業して社会に巣立った。それから兵役につくまでの二カ年と十カ月、家にあつては家業である農業に打ち込み、その間隙を利用して私